

その 39

ヒロシマの光と風



旧制広島高校（現広島大学付属中・高等学校）講堂

平群朝臣が嗤ふ歌一首

「子ども 草はな刈りそ ^{やほたて}八穂蓼を ^{あそ}穂積の朝臣が 腋草を刈れ」

（おいみんな、草など刈るな。穂の多い蓼の穂積の朝臣のあの腋毛を刈れよ）

平群朝臣（巻 16・3842）

穂積朝臣が和ふる歌一首

「いづくにそ ^{そほ}ま朱掘る岡 ^{こもたみ}薦畳 平群の朝臣が 鼻の上を掘れ」

（どこにあるのか、朱砂を掘り出す岡は、薦畳の平群の朝臣の赤っ鼻の上を掘れ）

穂積朝臣（巻 16・3843）

万葉集の中では、時に愉快なつむじ風が吹く。「腋臭が臭いから、その腋毛を剃れよ」と揶揄われ、ならば「朱が足りないなら、お前の酒焼けした赤鼻を掘れ」と言い返す。つむじ曲がりの親しい仲間同士でやり合っている歌であろう。いわゆる、滑稽問答歌だ。

滑稽歌というと、阿川弘之氏が、旧制広島高等学校時代、同期の大浜巖比古氏の武勇伝を詠んだ「ジョッキを3つ かつぱらひ来ぬ」の歌が思い起こされる。アラragi派の土屋文明氏から赤点を付けられた歌だが、それ以来2人は40年以上にわたり、親友として忌憚のない愉快なやり取りを重ねることになる。今回は、そんな2人が広島高校で出会う前、つまり、それぞれの出身中学校はどんなだったのか、当時の広島の中学校の状況を見てみよう。

2人が卒業した中学校は、阿川氏は広島高等師範学校附属中学校（広島高師付中）、大浜氏は、広島県立広島第一中学校（広島一中）だった。阿川氏は、当時の広島高師付中と広島一中のことを次のように書いている。

＜私の出た中学（広島高師附属中）は、自由主義的なお坊ちゃん学校と世間から目されてあつたが、それはスパルタ式の県立広島一中あたりと比較しての話で、実際の規律は、戦前のこと故相当厳格であ

った。教練、寒稽古、上級生の説教、いづれもきつかったし、映画館立入りも原則として禁止で、のびのびした楽しい思い出は少い> (「私の中の日本人—中島光風先生」、昭和 50 年)

阿川氏は、広島高師付中は「自由主義的なお坊ちゃん学校」と書いているが、実は、今でいうエリート校だったようだ。そのエリート校広島高師付中に、昭和 20 年 1 月、ある特別学級が編成されることになる。特別科学教育研究のための教育機関、いわゆる、「科学学級」である。全国に先駆けて東京高師附属中と広島高師附属中の 2 校に、各学年 1 学級の科学学級が設置された。東京の科学学級は、附属中の在学学生から選抜されたが、広島は、例えば、3 年の科学学級は附属中から 13 人、そして、西日本全域から選抜された 18 人、合わせて 1 クラス 31 人の編成となった。

特別学級設置の趣旨は明確で、それは戦争のための英才教育が目的だった。前年の 19 年に帝国議会に提出された建議によると、次の通りである。

<「戦時^{えいさい}顕才教育機関設置二関スル建議」>

政府ハ緊迫セル現戦局ノ様相ト其ノ抗戦ノ長期化ニ鑑ミ我が国ニ於ケル科学技術界ニ画期的創造ヲ齎^{もたら}シ戦闘力ヲ強化シ以テ聖戦完勝ノ寛ヲ挙グル為学徒中ノ顕才^{かんぼつ}児を簡拔シ最高ノ知能ヲ發揮セシムルヤウ速ニ特別ナル教育機関ヲ設ケラレムコトヲ望ム、右建議ス>

この建議に基づき、若き日の湯川秀樹博士等を中心に、幼き英才たちに、「アメリカに勝つ新しい発明をしろ」というため、特別な教育を施す特別学級の生徒たちが選抜され、勤労働員からも除外されて学業に専念することになる。広島高師附属中の特別学級「科学学級」の指導者である物理学者で当時の広島文理大学三村剛^{よしただ}昂教授は、「間もなく大きな実験があるだろう。一つの都市を焼き尽くす実験だ。その時に君達は、科学を学ぶ生徒として、冷静な目で見つめてほしい」と話したという逸話が残る。その後の広島被爆を予言したものが、或いは、すでに始まっていたわが国の原爆開発について仄めかしたものが、いずれにしても若い英才たちに「原爆」のような「新しい発明」を期待したのであろう。もっとも三村教授は「この度の戦争には、原子爆弾は間に合わないと思う」と、言っていたともいう。かつて原爆番組の取材で、戦時中わが国の原爆開発に関わった軍の関係者から聞いたことだが、「わが国の開発レベルは、原子爆弾どころか、まだ原始爆弾だった」ことは、物理学者として見通していたわけだ。教授は、あの日爆風で深い傷を負うが一命をとりとめ、自らの被爆体験から原子力研究反対を唱え、戦後は、科学者京都会議で原爆の惨状、核戦争の危険を訴え続けた。

明治 38 (1905) 年創立の広島高師付中は戦後幾たびか改編、改称され、昭和 53 年広島大学付属中学校、同高等学校となり、通算すると創立 115 年をこえる長い歴史を持つことになる。その同窓会「アカシア会」は、年 2 回、会報「アカシア」を発行して、同校の歴史を振り返っている。この会報「アカシア」全国版がネット上に公開されており、これらを参照しながら、広島高師附中や科学学級の被爆前後の記録を見ていく。

広島市のほとんどの中学校が、市内の建物疎開に動員される中、科学学級は勤労働員を免除され、学校に留まって授業を行っていた。戦局が厳しくなると、科学学級は、7月に1～3年生が、比婆郡東城町に疎開。他校の生徒が動員される中で、普通学級の1・2年生も、同月「農村動員」と言う名目で田舎に疎開した。そして、学校に残って授業を受けるのは科学学級4年生のみとなり、8月6日を迎えた。

そして、原爆による広島高師附中の死没者は、教職員8名、生徒19名。爆心地から約1.5キロのところにあった校舎はすべて焼失した。この日学校に残って2階の教室にいた科学学級の4年生26人は、被爆の瞬間崩れた校舎の下敷きになったが、「ラッキー」なことに、24人が生き残った。しかし、1階にいた教職員は全員が亡くなった。その1人に国語の瀬群敦^{せむね}氏がいた。瀬群先生は、1913年大分県生まれ。広島高等師範学校卒業後、41年から広島高師付属中の国語教諭となった。大分弁が残る語り口は生徒たちに人気だった。万葉集が大好きで、「瀬群統三」の名前で短歌を発表した歌人でもあり、生前たくさんの歌を作っていた。

当時の同窓生が、会報「アカシア」で被服廠に勤労働奉仕に動員された時、監督の身習い士官に反抗して、仕事をボイコットした時の瀬群先生の思い出を語っている。生徒たちが、軍に反抗して作業放棄、労働放棄をして、とうとう休憩室の中に立てこもってしまった。副官の大尉は日本刀の抜き身を振りかざして「お前ら、この時勢をなんと心得るか！この非国民が」と怒鳴る。そんな命懸けの大事件に、瀬群敦先生が被服廠との間に入って、話を穏便にしてくれたので、「重営倉になるところ」を、生徒たちは助かったという。

一方、当時1年生だった同窓生は、広島高師附中が建物疎開の動員を断った経緯を語っている。

「私達1年生と2年生のことです。建物疎開の作業を附属の先生が断ったため、将校が、ダーンと床を軍刀で突いて、『貴様、非国民め！』と言ったそうです。でも先生は頑として引かずに。（略）そういう発言ができた学校です、附属っていうのは」

「まあ、その代わりね、附属だけが助かったっていうので、もう延々と言われたわな」

「ずっと私は口にチャックをせざるをえなかったですね。地元の小学校の仲間は全部死んでいますから」

「自然に附属はけしからんという話になるんですから。私も、もうずっと口にチャックだったです」

（以上、会報「アカシア」全国版、473号）

工場などでの勤労働員や建物疎開の動員などに抵抗する付属中の教師や生徒たちの姿は、重苦しく暗い戦時体制の中の一筋の光だった。そして、間違いなく、それが生徒たちの命を救う光明だったのである。

前回、建物疎開に動員された市内の中学生の死者の数が、他校に比べて広島高師附中がけた違いに少なかったのはなぜか、と書いた。阿川氏がスパルタ教育と書いた広島一中は、建物疎開に出た教師、生徒は全員被爆死、校舎内で待機していた生徒の殆ども犠牲となり、死没者の数は、教職員12人、生徒354人。他に、崇徳中の場合は、全員で死者522人にも達している。それに対して、付属中の死没者が、教職員8名、生徒19名にとどまったのは、科学学級の生徒が動員を免除されて疎開し、普通学級の1・

2年生も、「農村動員」という名目で疎開したからだったのである。

当時、科学学級4年生で、会報「アカシア」でも、科学学級や被爆について語っている元毎日新聞記者山野上純夫氏は、同紙上に「被爆記者の回想」として、国語の瀬群先生のことを書いている。

〈昭和17（1942）年に付中に入学した直後、先生から万葉集の次の1首を教えられた。

「韓^{から}ごろも 裾に取りつき 泣く子らを 置きてぞ来ぬや 母なしにして」

「巻二十」にある、信濃（長野県）出身の防人が詠んだとされる歌である。妻に先立たれた父子家庭の父親に、防人になって九州に赴けとの命令が届いた。父母を失う子どもたちは旅装の私にすがって悲しむけれど、天皇の命令には従うしかない、という内容である。

戦時下の日本では、召集令状の「赤紙」で一家の働き手が次々に戦線に送り出された。召集令状を受けるのは日本男子の名誉であり、誇りとされていた。その中で瀬群先生はこの歌を教材にされたのだ。

敗戦直前、米軍幹部の名を入れ「いざ来いニミツ、マッカーサー、出てくりや地獄へ逆落とし」という歌が作られた。先生は「これが日本の詩人の作品かねえ」と嘆かれたのを思い出す〉（毎日新聞 2019年3月15日付地方版）

同じ19年7月、中国新聞も、瀬群先生に関する記事を報じている。あの日、付属中にいた瀬群先生は、倒壊した木造校舎の下敷きになった。翌日から焼け跡を捜した同僚は「瀬群教官の遺骨はそこにあった彼の時計ですぐに確認できた」（同校「創立百年史」）という。31歳の若さだった。そして、1979年、教え子たちが、先生の遺稿歌集「^{とみやまなみ}遠山脈」を編集、刊行した。

「膝につく程頭を下げて 過ぎ行きぬ 新しき服の 一年生は」

などと教諭生活を詠んだ作品のほか、尾道などの自然風景や時局を扱った計857首が収められている。

取材に当たった水川恭輔記者は、令和初めての原爆の日を前に、その死をあらためて悼んでいる瀬群先生の教え子たちに話を聞いている。先に紹介した山野上氏と同期、1942年入学の同窓生たちで、当時先生は国語を教えた3クラスのうち1クラスの担任も務めていた。

〈呉市に住むNさん（取材当時89歳）は国語の授業で「万葉集は人間賛歌だよ」と教えられた。「戦時下でも、人や自然を愛するのが大事と伝えたかったのではないか」と話す。（略）

熊本市のMさん（当時89歳）も、生徒に寄り添った人柄をしのぶ。例えば、英語に関心のあったMさんが動員時、倉庫の軍靴を包んでいた米国の新聞を盗み読んでいたとき。「瀬群先生はしかるどころか英文の意味と一緒に考え、分からなければ持ち帰らせてくれた。公になれば、ただでは済まなかつたろうに」>

そして、水川記者は、思いがけない人を取材していた。これまでも、本稿で紹介した万葉集研究の第一人者の中西進氏である。瀬群先生が愛した万葉集由来の新元号「令和」の考案者とされている中西氏も広島高師付属中に在籍していたのである。

同級生の話は続く。

< (あの日) から 74 年。中西進さん考案とされる令和の始まりに、同級生は瀬群さんをしのび、「あの日」を繰り返さないと誓う。被爆証言を続けてきた 1 人は「教え子が万葉集から考えたとされている。知れば先生も喜ぶだろう」と話す>

水川記者は、中西氏に瀬群先生の思い出を取材している。中西氏も先生の時計は印象深かったようだ。
<「瀬群先生に大好きな国語を教わった。いつも鎖のついた懐中時計をして、眼鏡の奥の目をきらきらさせていた姿を思い出す」(略) 万葉集研究の直接のきっかけは付屬中に 2 年間通った後、東京に転校してから。一方で「広島で国語の面白さを学んだ」と話し、先生の被爆死を「ああ、若くして…」と惜しむ。(略) 中西進さんの同級生の多くは、被服廠で被爆した。「私も転校せずに広島にいれば、被服支廠で被爆していただろう。戦争は二度と起こしてはならない」。原爆の日に向け、新時代が平和であるよう同級生たちと願いをともにする> (「中国新聞」、2019 年 7 月 31 日掲載)

広島大学附属中学校の校門を右に、広島高等師範学校附属中学校原爆死没者・戦没者慰霊碑が立っている。そこには、瀬群先生や同級生の名が刻まれているが、もし中西氏の転校がなかったら、その名も刻まれていたことになったかも……

現在の付屬中学校の講堂は、被爆を生き抜いたかつての旧制広島高校の講堂である。講堂入口の床に刻まれた「2587」の文字は、講堂の完成年の昭和 2 年を皇紀で示したものである。

本稿の(その 7)「令和の考案者が選んだ万葉秀歌」で、中西氏は、近刊の著書の帯に、次のように書いていることを紹介した。「万葉集は、『令(うるわ)しく平和に』生きる日本人の原点です」。新元号に込めた願いは、まさに「令しく平和に」にあり、同級生の命を奪い傷つけた「原爆」は言うまでもなく、「戦争は二度と起こしてはならない」という願いが込められた元号であった。

いずれにしても、本稿を通じて、幾たびか引用紹介させてもらった 2 人の重要な「日めくり万葉集」の選者、中西進氏と、そして、阿川弘之氏が、広島師範高等学校附属中学校の先輩後輩として繋がっていた。9 年という歳の隔たりはあるが、2 人は同じ学び舎で万葉集にはじめて接した同窓生だった。中西氏は、原爆投下の 2 年前の昭和 18 年、転勤により東京の中学に転校し、阿川氏は、翌 19 年、広島の両親と恩師の光風先生を尋ねてから中国に出征した。そのためともに被爆をまぬがれ、戦後は、それぞれの道を究めて、お互い文化勲章を受章した。一方、被爆死した万葉を愛する歌人瀬群敦氏と万葉学者中島光風氏が、もし被爆をまぬがれ生きていたとしたら、2 人は、その後どのような歌を詠み、どのように万葉集を読み解いたのだろう。2 人の幻の歌集、幻の書を読んでみたい。この後紹介する光と風のごとき歌に続く幻の歌を……そのようなことを言っても、詮無いこと、いや、詮無い言か、なんとも惜しまれるところだ。

中西氏から 1 通の私信をいただいた。そこに、書かれた言葉は、示唆に富み、万葉集のごとく豊かなひとこと、一葉の言の葉が光芒を放つ……「万葉は、自由だからいいですね」

確かに、万葉集そのものが自由だ。天皇から地方農民まで幅広い階層に及んでいることは言うに及ばず、天皇が菜を摘む乙女に名を問い自らも名乗る 1 番歌から始まり、身分を超えた奔放な相聞歌の贈答、作者未詳歌が全体の半数近いこともその表れだろう。巻 16 は、とりわけユニークで、人を嗤う歌やナンセンスな歌、お題の言葉を詠み込んだ歌や屎くその歌まで、シュールで自由だ。私は、この巻を「漫葉集」と呼んでいる。

そして、それらの歌を読む方も自由でいい、読み解き方も、それぞれでいい。大浜巖比古氏の『万葉幻視考』が思い返される。光仁天皇勅撰説や中皇命＝額田王説等、それに対する異論も含めて、自由で独創的な解釈も万葉集を読む魅力の 1 つだろう。とすると、万葉集の忠君愛国を愛する読み方も自由なのかもしれない。森岡美子氏の『萬葉集物語』が思い起こされる。言うまでもなく、忠君愛国の歌、その精神を詠った歌は、数は少ないとはいえ、確かにあるのだから。ただ、それは、読み手個人が選択する場合だ。国が、その歌を選んで国民に押し付けるのは許されることではない。防人の「醜の御楯」の歌や軍歌「海ゆかば」が、その例であることは言うまでもない。「言の葉」は、権力者や国家の使い方次第で、「言の刃」となって人々を傷つけ、国民の命を奪うのである。たまたま太平洋戦争開戦 80 年目の 12 月 8 日、本稿を書いているが、このような万葉集の使い方は認められるものではない。

中西氏の私への私信は、「ちょっと見当違いだけれど、万葉の解釈は自由でいいですよ」と、翻訳できるのかもしれないが、それもまたよし。「言の刃」などと、勝手な造語を作り、巻 16 を、「漫葉集」など呼び、坂上郎女に、甥っ子の「ヤカモチ」を、「ヤキモチ」と呼ばせ、私「孫弟子」の身でありながら、幻の師、大浜「巖比古」氏を、「幻比古」先生など呼ぶのは、詮無い言、門外漢の世迷言、門の外から起こす空っ風に過ぎない。改めて、本稿の冒頭に掲げた歌、3842 番の「腋毛」の歌をご覧いただきたい。この滑稽歌は、光風先生の名前の通り、キラッと煌めく光と草原を渡る風のごとき歌を思い起こさせる。先生の次の歌である。

「をとめごの 愛しき腋毛 眼に近く 五月のバスの 混みあへり」

いかにも万葉学者らしく謹厳で実直な光風先生。戦局ますます厳しい中にもかかわらず、そんな先生が、乙女の若草の爽やかにして艶めかしい歌を詠む、言のもののふぶり。万葉秀歌に追いつき乗り越えることができるのは、そんな一瞬の光か、一陣の風か？もののふ光風、万葉集を受けて立ち、万葉人に負けてはいなかった証かも……いや、逆も真なり、そんな光風先生に、万葉人も負けてはいなかった証なのかもしれない。

万葉集に限っては、こんな遊び心も「またよし」として、これからも万葉集と付き合っていきたいものだ。「ヤキモチ」さんも、そんな付き合い方にヤキモチを焼いてくれるか、或いは、アキレて「言の葉」もない、と申されるか。まあ、後者の方だろうが……それもまたよし。

3842 番歌を最後に持ってくる万葉論も滅多にないだろうが（いや、「ヤキモチ」や「言の刃」は先達もいるようだが、こちらはまったくないだろう）、本稿は、いったんここで区切りとする。次回以降は、最後に私自身の体験的「万葉集物語」を振りかえり、また、もうしばし、「万葉集ができるまで」等の「万葉ファンタジア」を連載して、「万葉集ナウ」を終えることとしたい。

